

ありがとう。 澁谷 繁樹さん



十五代 沈 壽官

大将は黙って聞いていたが、カウンターの隅に座っていた男が、ギョロリと僕を睨みつけて「おい、文句があるなら幾らでも聞いてやるぞ！」と凄んだ。

それが澁谷 繁樹との出会いだった。

最初に会ったのはいつだっただろう？
日時は忘れたが、その時の事はハッキリ憶えている。

大将が「沈壽官の息子だよ」というと、「ほー、じゃ早稲田か。後輩だな」とニヤリと笑った。

フグ屋のカウンターで飲んでいた私が、店の親父にこう言ったのだ。

こちらも「あ、先輩ですか。失礼しました。」と頭を下げた。

「大将。今朝の南の社説読んだかい？昨日の社説も、一昨日の社説も読んでバラバラで何を言いたいのかさッパリ分からん。あれじや論説委員の投稿欄だな。

「隣に來いよ」と言われて、「俺も時々そう思うんだよな」と言って破顔一笑。その日から澁谷 繁樹は僕の兄貴になった。

思い出は山のようにある。

登り窯に付き合ってもらった事、一緒に韓国に行った珍道中、川内支局長の頃は、二人で温泉三昧。

教えてもらった歌は数多い。全て女性歌手のものだった。

南日本新聞の記者のくせに、NYタイムスの記者の様だった。

タバコは止めると何度も言ってみたが無駄だった。

いつも「一輝、一輝」と呼んでくれ、悲しい時も嬉しい時もそばに居てくれた。

そういえば、叱られた事が、一度だけある。

ソウルのホテルに泊まり、部屋で仕上げの酒

を飲んでそのままゴロリ。

朝、目が覚めて僕がシャワールームから出て来ると「馬鹿野郎！」

12月の雪の夜に窓を開けて寝る馬鹿がどこにいるんだ！」

確かに澁谷さんのベッドの隣の窓は開いていた。

「何言ってるんだよ。自分で開けたんだろ！何で俺が」そう言うと、「そうか、ま、そうだよな」と苦笑い。「人のせいにするんじゃない！」って怒鳴ると「ごめん、ごめん」って大笑い。

兄弟の様に思っていたが、病魔は兄貴に目をつけた。

コロナの中、見舞いにも行けず

時々携帯で連絡を取り合うだけになった。

「お話しができません 息切れと仲良しです」

これが今年の3月17日夜10時47分の連絡だった。

「頑張れ！」と打ち返したら

「お互いでしょ」って。

最後、出棺だけ見送ろうと外にいた僕に長男さんが「沈さん、長男の鉄一郎です。親父の最期の顔、見てやってくれませんか？」と、言われた。

あー、この子が澁谷さんに、「子供が出来ました。学校辞めて働きます」って言った子か、と思ひ、その立派な姿に従った。

蠟人形のような死に顔。

言葉が出ずに涙が止まらなかった。

奔放に生きた男だと思う。

ただ、本当に優しい男だった。

そして今、天上の人になった。

ありがとう。

本当に良くしてもらいました。

僕はもうしばらく、生地獄を這い回ります。

出会えて幸せでした。

ありがとうございました。

合掌

